

# 白血病後発薬 値下げ

## 他社の半額 普及、患者負担減狙い

滋賀の製薬会社

高額な白血病治療薬の後

発医薬品（ジェネリック医薬品）の普及が進まないため、大原薬品工業（本社・滋賀県甲賀市）は、自社のジェネリックを他社の半額程度に値下げした。

この薬は、慢性骨髄性白血病の患者が主な対象。2001年に登場した先発品「グリベック」は、同病の5年生存率が90%を超える特効薬だが、原則として生涯飲み続ける必要があり、患者の経済的な負担が問題

になっている。

グリベックのジェネリックは14年に発売。薬価は先発品の半額ほどで、現在は17社が扱うが、普及率は約1割にとどまる。患者が支払う医療費の自己負担は、収入などに応じて上限が決まっており、ジェネリックを選んでも先発品と負担額がほぼ変わらないためだ。

この状況を変えようと、同社は卸値を下げ、国の定める薬価が今月から他社の

半額程度になった。こうした取り組みは異例。同社に

よると、年収約370万、770万円の70歳未満の人が標準的な処方を受けた場合、年間の自己負担額は先発品の約42万円に対し、約29万円になるという。

大原誠司社長は「ジェネリックを普及させ、患者さんの負担を減らしたい」と話している。